
アルテリア大陸の黄昏

秋葉夕輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルテリア大陸の黄昏

【Nコード】

N3728H

【作者名】

秋葉夕輝

【あらすじ】

かつて肥沃な大地であったというアルテリア大陸。しかし、何故かここ20年ほどは天候不良が続き、人々の暮らしも年々厳しくなってきた。また、街道や街に魔物が跋扈するようになって久しい。その大陸の南端に位置するグルニア王国。第三王子であるカストゥールは、北西の間の山に巢食う闇の魔王・デュラガの居城を調査するため、食いつばぐれた傭兵や冒険者たちの面接を行い、パーティーメンバーを選定する。その結果、奇妙な仮面をかぶった魔術士、金のない学者くずれ、世間知らずの少年、同性から嫌われそう

な女性など、ユニークな冒険者が王子の元に集う。

ブローグ

広大なアルテリア大陸の南端に位置する、大陸最大の商業国家であるグルニア王国。その首都・グルトスにある王城の一角では、今まさに北西の魔の山に巢食う魔王調査隊の人員選抜が行われようとしていた。

石畳に石壁の殺風景な兵士控え室を利用した会場には、皮の鎧を身に着けた傭兵やレザージャケットをまとっただけの軽装の男、巨大な剣を抱えた女剣士まで、さまざまな様相の荒くれ者が思い思いの格好で待機しており、その数は30人ほど。

彼らは大陸各地からこの調査隊に加わるために集まった者たちで、倍率100倍ともいわれた書類選考を突破した猛者ばかりだ。

「いつになったら始まるんだよ。もうかれこれ一時間以上は待たされてるぜ」

「一対一で面接なんて、今日中に終わるのかね。いったい誰がそんな酔狂なことを」

集まった者たちの中から不満の声が上がり始めたころ、ようやく入口のドアが開いて30歳前後に見える青年が現れた。使い込まれた鋼鉄の鎧を身につけ真紅のマントを羽織った、精悍な顔つきの男の姿を見た何人かは、その正体に気づいてささやきあった。

「第三王子のカストウル様が人員を集めているのか。こりゃあ調査隊に加われれば名が揚がるぞ」

第三王子はおもに大戦の指揮官として活躍しているが、百戦百勝の名將軍。魔物討伐の功もアルテリア大陸中に知れわたっている。

彼は面接予定者たちの前面に立ち、室内ををぐりと見わたした。すると、それまでざわついていた会場は一瞬にして静まり返る。王

子はおもむろに口を開いた。

「アルテリアは1000年の長きにわたって、五大神……光明神レイム、大海神パウロ、炎の女神ヘカテ、大地の女神コルティカ、風の女神フィリフの加護を受け、肥沃な大地と温暖な気候をもつ美しい大陸として繁栄してきた。しかし……」

彼は視線を落とし、声のトーンを低くする。

「ここ20年ほどで、大地の生命力は急速に失われてしまった。空は常に暗雲で覆われ、作物は不作に見舞われ、清流は輝きを失い、おぞましい魔物が街道や街を跋扈するようにさえなってしまうている。人々の希望も失われてしまって久しい」

「暗黒神クオンが、アルテリアを破滅させようとしているんだ！」

誰かが声を上げ、同意の声で会場が再びざわめき出した。この世界は暗黒神によって滅ぼされる……そんな恐れの声は、人々の生活が苦しくなるほどに大きくなってきている。

「皆静粛に！」王子の傍らに控えた王宮兵士が大声で傭兵たちをなだめた。王子はさらに言葉を続ける。

「グルトス王城の街にも近年魔物が出現するようになった。これらの魔物は、王城の北西にあるガラド山に住みついている闇の魔王・デュラガが差し向けていると噂されている。そこで先日、5000人の兵からなる討伐隊を編成して魔王の居城に向かわせたが、途中で行く手を黒い霧に阻まれて、たどり着くことがなかった。現在も1000人以上の兵士が、黒い霧による原因不明の病で倒れたままだ」

王子は再び面接会場に集まった人たちを見わたした。

「そこで今回の任務だ。パーティーの人数は私を含めて4〜5人とし、まずは魔王の居城への安全な進入口を発見する。そして可能ならば、魔王の討伐を行う。選ばれた者には前金として10万ギルを渡し、調査が成功した場合に追加で50万ギル、討伐できた場合には500万ギルの報酬を支払う」

500万ギルといえば、10年は遊んで暮らせる金額だ。会場の人たちも口々に驚きの声を上げた。

「ただし、報酬が高いために危険な任務であることは確かだ。今回少人数での募集にしたのは、北方の国境に兵力を集めているからでもあるが、魔王討伐における犠牲を最小限に抑えようという意図もある。この場で気が変わって面接を受けなくても一向にかまわない。もう一度よく考えてから、その気があるなら手持ちの番号札の順番で面接室に来てもらいたい。選考の結果は、3日後の朝に門前の掲示板にて発表する。どうかよろしく頼む」

言い終えると王子は面接を行う小部屋に姿を消した。

「1番の番号札を持つものは入室してくれ」

王宮兵士が小部屋への扉を指し示した。こうして、魔王調査隊最終選考の面接が開始された。

朝から行われていた面接は、昼食休憩をはさんで約8時間後に最終となった。

「30番の札な人は入室！」

王宮兵士もいい加減疲れていて、言葉や態度もぞんざいになってしまっている。最後に呼ばれた男は、漆黒のローブを身にまとい、顔の上半分を白い仮面で隠している異様な風体の青年だった。薄茶色の長髪は首の後ろでひとつに束ね、背中に少し流れている。

小部屋へのドアを開けて入室し、男は自己紹介を始めた。

「ガイルと申します。よろしく願います」

こちらもあり疲れが隠せないカストゥール王子は、右手で両肩を軽く叩きながら、書類選考時の書類に目を落とす。

「水の魔術が使えるということだが、実際に見せてもらえるだろうか」

かつては大陸の各地で普通に魔術が使われていたが、現在では魔術を使える人間などほとんど残っていない。王子も今回の試験まで人間が使う魔術を見たことがなかった。

ガイルと名乗った男は、早速短く呪文を唱えた。すると空中に透明な水滴が現れ、それがみるみるうちに拡大していく。

「この聖なる水で、ケガを治療することもできれば、敵を攻撃することもできます」

「すると、黒い霧で病んでいる兵士たちのことも、癒せるのだろうか？」

「いえ、水の魔術で治癒はしません。そもそも、魔術での治療は人のもつ治癒力を最大限に増大するものです。ただし、以前同じような黒い霧による病気に見舞われた人を見たことがあります。おそらくもう2、3日で快癒するかと存じます」

「そうか。よくわかった」

その言葉を聞いて、ガイルは人の顔ほどまで膨らませていた水滴を一瞬で霧散させた。

王子は少し考えるようなそぶりを見せた後、ガイルを見てつぶやいた。

「君はほかの魔術……たとえば、光や風、火……すべての要素の魔術も使えるんじゃないのか？……光の魔術を使ったり、複数の魔術を操る人間がいるなどは、聞いたこともないが」

ガイルは微笑して答える。

「やはり、第三王子のカストゥール様は人が持つ要素……エレメントを見る力をおもちなのですね。人の噂によれば、カストゥール様は火、水、風、土の四大要素の力をより強く持つ人を雇い、バランスを考えて編隊を組まれるからこそ、必ず任務を成功されるという話ですが……」

「噂になっているのか……確かに、そういうところはある」

「王子が仰るとおり、私はすべての要素の魔術を使うことができます」

す。光のエLEMENTが必要ならば、私にお任せください。もちろん、書類に書いた通り本業の剣の腕にも自信があります。必ずご期待に沿えるかと存じます」

ガイルはここぞとばかりに自分を売り込んだ。王子は軽くうなずいてガイルの顔に目を向けた。

「最後の質問だが……その白い仮面はいつたい何なんだ？ 奇妙な印象が拭えないぞ」

「それは、ええと……」

予想外の質問に、ガイルはしばし言葉を失う。

「目の周りに星型のホクロが5個くらいあって、恥ずかしいから……などという理由では、やはり無理がありますよね、うーん……」

「……了解した」

ガイルが言葉に詰まるのを見て、王子は深く追求するのを止めておいた。

おそらく理由を言う気がないのであろう。この任務において必要なのは実力のみ、姿かたちは関係ない。

最終面接者のガイルが部屋を出た後、部屋の片隅に控えていた王子付きの王宮秘書官が、王子に言葉をかけた。

「怪しい雰囲気の子ですね。正体不明な感じがします」

カストゥール王子は苦笑いしてこれに答えた。

「なんだか、こちらが面接を受けているような気分になったよ。力を制御していたようだが、恐ろしく強大なELEMENTを持っているようだ。今回の調査隊の、成否の鍵を握る人物になるかもしれない」

そして心の内でつぶやいた。

「闇のエLEMENTまでもっているというのは……いつたい彼は人間なのだろうか？」と。

面接日から3日後の朝、魔王調査隊に選ばれた4人は、王宮兵士の案内に従って王城に入った。通された一室はどうやら会議室のようで、部屋の中央には巨大な円形のテーブルとイスが置かれている。壁には五大神の神話の一説を描いた絵画が掛けられており、先日面接を行った部屋などと比べて格段に重厚な造りだ。

4人が部屋に入りイスに座ると、すぐにカストゥール王子が入室してきた。そしてテーブルを囲むイスのひとつに腰掛けて言った。

「まずは、今回の任務に協力してくれることに礼を言う。今後はしばらく皆で行動をとめることになるが、私のことは王子ではなく同じ冒険者仲間として扱うようお願いする。名前は呼び捨てでもらってかまわない。たださえ名前が長いからな」

4人はそれぞれ顔を見合わせたり目を見開いたりして驚いた。

「それは……少なくとも、私めにはできかねる話かと存じます」

4人のひとりが言った。カストゥールはニヤリと笑った。

「それだ。そんなことを言っているうちに、敵や魔物に殺されてしまうぞ。できない、と言えば済む話だろう？」

「わかりまし……いや、わかった」

先ほど発言した男は、しぶしぶうなずいた。

「さて、まずは自己紹介といこうか」

4人はカストゥールに注目した。今日も面接時と同じ服装をしており、背が高いので存在するだけで他に威圧を与える迫力がある。

グルニア王国では一般的な金髪を短く刈り込んでおり、顔は日に焼けて赤銅色に染まっている。

「私はグルニア王国の第三王子、カストゥール。年は32歳で、個人的に大海神パウロを信仰している。また、今回は魔王調査隊のリーダーを務める。これまでに北方戦線で隊を指揮した経験などがあるが、少人数での隠密行動もけっこう得意だ。武器は主に両手の剣を使い、槍術や体術も多少かじっている。それじゃあ、右回りに紹

介していいとか」

カストウールの右側にいた人物が立ち上がった。アルテリア東部に多い黒い髪と瞳をもち、背が低いので少年にしか見えない。

「僕はコルドバ王国出身のマヒト、14歳だ。家は代々狩人を生業にしている。魔物討伐の経験はないけど、風を読むのが得意だから、弓ならまかせてくれ。それから、信仰は代々風の神フィリフを祭っている。こんな感じかな……よろしくお願いします」

「何で子どもが参加してるのよ」

その隣に座っている、茶髪で赤いローブを身につけた女がつぶやいた。マヒトはキツとその女をにらみつける。

女もにらみかえたので、2人の間に一瞬緊張が走った。

カストウールが仕方なく場をとりなす。

「今回の任務に必要なだと判断したからだ。そういった質問は私にしてくれ」

「了解したわ。次は私ね。名前はライザで、年齢は秘密。ここグルニア王国で炎の神殿の神官をやっているわ。短剣の訓練は一通り受けているけど、火の魔術のほうが得意よ。みんなよろしくね」

「魔術が使えるのか！」

先ほどのマヒトがまじまじとライザを見た。ライザは得意げに笑い、マヒトの頭を軽くなでた。

「あなたかわいいから、ピンチになったら助けてあげるわよ」

「子ども扱いするな！ 自分の身くらい自分で守れる！」

「まあまあ、お二人とも非建設的な口論はお止めなさい。次は私です」

二人の間に入った男は、この場に似合わない学者然とした服装をしていた。どこから見ても傭兵や冒険者には見えない。

「私は北に接するシシリア国からグルニア王国に亡命してきた、オルノスという者で、アルテリア大陸全土の歴史を研究しています。」

信仰はとくにありませんが、暗黒神クオンを主に研究しています。史書によれば、クオン神は400年前まで六大神として祭られていたのに、いつの間にか諸悪の根源とみなされるようになった……それは何故なのか。おそらく、その頃世界を恐怖の底に落とし入れた暗黒王ガノスと混同されていると思うのです。まあそれはともかく今回は、カストゥール王子の活躍を実際にこの目で見て、記録するために参加します」

「って、何で歴史家がいるんだ!？」

「ちょっとおかしくない？ 危険な任務とか言っただけでなかったっけ？ マヒトとライザは口々に疑問を口にした。オルノスは一瞬の沈黙のあと、こぶしをあげて震えだした。

「もちろんこんなご時勢……ただの歴史家では食べていけない……い、いえ、そうではありません！ 歴史が創られている現場を目撃するために、今までに十数回は魔物討伐隊に加わっています。そう、数十回も!! アルテリアの歴史は、現場で創造されているのですっ！ ちなみに年は29歳です!!！」

最後のほうはすでに絶叫口調になっている。その迫力に、発言者を除く4人は思わず黙り込んだ。

「そ、そう。頑張っただけ」

しばらくして、ライザはようやくそれだけをつぶやいた。

最後に、黒いローブを着た例の男が自己紹介する。

「俺の名前はガイル。テヘル王国北部の出身で年は18。剣が得意で水の魔術が使える」

「あなたも魔術が使えるの!？」

ライザが驚いて尋ねる。

「まあね。剣を使って仕事をする人が多いけど」

「ところで、その変な仮面はいつたい何なんですか？」

オルノスは先ほどの動揺から立ち直り、余計なことを質問してしまった。

その瞬間ガイルの仮面の奥で、何か得体の知れないものがキラリと光った。

カストウールの全身に、戦闘中をしのぐ緊張感が走りぬけた。

「ふふっ」ガイルは少しだけ笑った。

「それは、だね……俺の目を見たものは、すべて石になってしまうという世にも恐ろしい理由があるからさ。ほら、ね？」

ガイルは木製のテーブルを指差して、短く呪文を唱えた。すると一瞬にしてテーブルは石になり、表面に無数のヒビが入った後、ガラガラと崩れ落ちてしまった。

「危ないから、仮面は外せないんだよ」

ため息をつきながら、ガイルは悲しげにつぶやいた。

「……………」

ガイルを除く4人はそれぞれ「仮面を外してないじゃない」とか、「それは水の魔術じゃない気がするが」などという思うたが、口に出しては何も言わなかった。

「と、とりあえずだ」

カストウールが気を取り直して言った。

「出発は明後日の早朝とする。夜明け頃に城の門前で待機していてくれ。魔王デュラガの居城であるガーラド山までの行程は徒歩5日ほど。西へ向かう街道に沿って行くが、途中で横道に入るので馬車は使わない。……途中の戦闘で馬が使い物にならなくなる可能性もあるし……水や食料は途中の村でも手に入るが、念のために前金で各自用意しておいてくれ。宿屋の料金については、私のほうで支払いをする。ほかに何か質問はあるだろうか？」

4人ともとくに質問はなかった。だいたいこのような任務は、実際に行動して見ないと状況が読めない……それが冒険者たちの共通

の認識だった。

第1話

グルトス王城の城壁の外には、わずかな畑と広大な荒野が広がっている。空は厚い雲に覆われ、渴いた冷たい風が街道を吹き抜けていく。かつては地平線まで豊かな草原が広がっていたのだが、現在はその面影を見出すことはできない。

5人がグルトス王城を出立して3日が過ぎた。これまで何度か魔物の襲撃に遭ったが、彼らの手にかかれれば魔術を使うこともなく簡単に蹴散らすことができた。

「案外魔物ってチヨロイもんだね。今回の仕事は意外と簡単なのかな」

ライザと並んで歩くマヒトが言った。ライザは前方を歩く3人を見ながらつぶやく。

「魔物退治に慣れていそうなカストウルやガイルだけじゃなくて、学者上がりのオルノスも見事な槍術を使うわね。ちょっと独り言が多いのが難だけど」

マヒトは大きくうなずいた。

「何か、ときどきブツブツと意味分かんないこと言っているよね。」

昨日の夜も、虚空に向かって光明神がどうの、世界樹がどうこうとか唱えていて気味悪かったよ。おまけに、信仰はないとか言っているけど、暗黒神なんかに興味持つちゃって」

「気味悪いつていえば、ガイルもやばいわね。最初会ったときからそうだけど、どっかちぎれているのよね。夜になるといきなり姿を消したりするし、昨日なんて食堂の片隅で何をやっているのかと思ったら、コップの水に魔術で渦巻きを作って遊んでいるのよ。微笑みながら。何やら、『アルテリアは脆く儂い。このような小さな渦で霧散してしまうほどに』とかつぶやいていたわね」

「こ……怖っ！」

二人はいつの間にか調査隊メンバーの噂話に花を咲かせている。

「カストウールは王子様なのに、ずいぶん気さくだね。最初は緊張したけど、剣の腕も確かだしいつも冷静だし、なんか憧れるな」

ライザは前に行くカストウールの背中に目を向けて言った。

「上の王子2人はボンクラだって言うし、案外王様になっちゃったりするかもね。だいたい、あの2人と話が合うってだけで心が広いわ」

「じゃあ、今回手柄を立てれば王宮に取り立ててもらえるかも？」

マヒトは意外に野心家なところをのぞかせた。

「おい、油断してるんじゃないぞ！」

前方に行くカストウールから声が投げかけられた。2人は「はい」と適当に返事をしておく。

2人の前を進むカストウール、ガイル、オルノスも、周囲に警戒しながら話はずんでいた。こちらはもう少し、聞く者が高尚に思える会話だ。

「アルテリアの大地はどんどんエレメント力が失われている……五大神はいつたいどうされてしまったんだろう？」

カストウールが天を仰いでつぶやいた。オルノスがそれに答える。
「神々の力がもはや大陸に行きわたっていないのは明白ですね。千年前の五大神と魔族との大戦で世界樹が失われてからは、神々の力で大地の力が保たれたと伝わっていますが」

「五大神も元は人間だったという話さ。人間の力で意外とどうにかなると思うけどね」

ガイルが悲観的になりそうな2人に対して明るく言った。カストウールとオルノスは顔を見合わせる。

「五大神が元人間？ その伝説は初耳だな」

「おい、……ちょっと待て」

ガイルが足を止める。その声に全員が立ち止まった。

いつの間にか周辺に焦げ臭いにおいが漂っている。前方の地面の何箇所かは、円形に焦げ付いていた。

「何かいる！」

カストゥールが鋭く言った。全員がすばやく武器を構える。その瞬間、街道の左側にあつた窪地から、黒いトカゲのような魔物が現れた。それが立ち上がると、人の背丈の二倍の高さになり、かなり巨大であることが分かる。

こちらから仕掛ける前に、巨大トカゲはカストゥールに向かって、ゴムのように伸び縮みする長い舌で攻撃してきた。

カストゥールは背後に飛んでそれを避けたが、魔物は彼の着地点を狙って巨大な火の玉を投げかける。

「水の壁よ！」ガイルはとっさにカストゥールの前に水でできた壁を出現させた。火の玉は壁に当たって盛大にくだける。ガイルは叫んだ。

「カストゥールは下がっている！ 狙われている」

「しかし……」

カストゥールは後方で剣を構えながら再び応戦しようとした。

「お前は水の壁の後ろで、この場にある水のエレメントが強まるよう念じておいてくれ」

どさくさ紛れに「お前」呼ばわりされたカストゥールは、「水の魔術なんて使えないんだが」などとぼやきながら、とりあえずガイルに言われたとおり念じてみる。

ライザは火の魔術で攻撃しようとしたが、ガイルはこれも止めた。「火の攻撃はトカゲに力を与えることになる。下がって短剣で応戦してくれ」

言いつとガイルは呪文を唱え、全員の武器に水のエレメントを付与する。

ライザは「分かった」と不承不承つぶやくと、短剣を取り出して素早く連投した。トカゲが少しひるんで後退した。

「マヒトは弓矢でトカゲの目と口の中を狙え。オルノスと俺はヤツ

の首と腹を狙う」

「了解」

オルノスは短く言い、槍を構えてしばしトカゲの隙をうかがった。その時、マヒトの放った矢がトカゲの右目に命中した。トカゲは耳障りな叫び声を揚げながら天を仰ぐかたちになる。

「今だ」

オルノスは長い槍でのどの部分を突き刺す。トカゲは口から黒い体液を撒き散らしながら暴れた。そこでガイルは高く跳躍してトカゲの頭に飛びのった後、左目に深々と剣を突き刺す。剣先はトカゲのアゴから突き出て、魔物に決定的なダメージを与えた。ガイルは剣を抜かずに地面に降り立つ。

「やった！」

ライザとマヒトは同時に言った。巨大トカゲは動きを止め、しばらく痙攣した後盛大な音を立てて地面に倒れた。そして間もなく、その死体は地面に同化するように消えてしまった。跡には、ガイルの剣がポツンと横たわっている。

「何だ今の魔物は……」

オルノスは、あつけにとられてトカゲが消えたあたりを見つめた。カストゥールは小さくため息を付く。

「これまで出現した魔物とはだいぶ違うな。今までの戦闘方法を変える必要があるかもしれない」

そして前方を指差して言った。

「もうじき街道最大の街であるカノツサに着く。夕食時によく戦闘時についての打ち合わせをしよう」

ガイルもカストゥールが指差した方を見てつぶやいた。
「確かカノツサには光明神レイムの廟があったな」

清冽な光をつかさどる光明神レイムは、五大神のなかでも別格扱いされており、アルテリアの民はすべてほかの神々を祭ると同時に、レイム神を信仰しているといわれる。

「じゃあ見学！　じゃなくてお祈りしようよ！　きつとご利益があ

るはず！」

マヒトは先ほどの激しい戦闘を忘れて、すでに観光気分になっているようだ。マヒトのほかのメンバーは、軽く笑って同意を示した。ガイルは複雑な顔を、街道の先に向けた。

行く手には美しく白い塔が霞むように見えていた。

調査隊一行は、日没前にカノツサの街に到着した。まずはカストウールの常宿である宿屋『太陽の止まり木』にチェックインして部屋に大きな荷物を置いた後、レイム廟へ向かった。

さすがに大きな街だけあって、石畳の往来には数多くの人々が行き交っていたが、武器を携帯する者も多い。カノツサにもいつ魔物が現れるか分からないからだ。

クオン廟は街の北側中央に建っている。白い石造りの門の背後には巨大な塔が建てられており、それを囲むように神殿の建物が置かれている。5人は門を抜けて、まずは左手にある神官詰め所を訪れた。

「これはこれはカストウール様。今回もお忍びでいらっしゃったのですか？」

白いローブを身に着け、神官帽をかぶった40歳ほどの男が、一行に気づいて立ち上がった。

「いや、今回は公務で、西の魔王について彼らと調査を行う予定だ。いつも唐突に訪れて申し訳ない」

カストウールは後方の一行を示しながら言った。ガイルら4人は軽く会釈する。

「私はカノツサのレイム廟で神官長を務めております、ラーガと申します。どうぞお見知りおき願います」

神官の挨拶を受けて、4人はそれぞれ名を名乗った。神官ラーガは、党の方を指し示しながら言った。

「今日はレイム神の肖像画が公開されています。よろしければご覧になりませんか？」

「肖像が見られるのか！ 前は閉鎖中とかで見られなかったが？」
「契約により月に10日しか塔の地下を開放していないもので……
さあ、こちらへどうぞ」

一行は神官に従い、塔の地下へと続く階段を下りた。地下は塔本体よりも歴史があるらしく、石造りの階段は黒く変色して中央部分は磨り減って窪んでしまっている。階段の左右の壁には蜜蝋の灯火がともし、階段を薄暗く照らしていた。

しばらく階段を下りると、巨大な石の扉が現れた。ラーガが扉に軽く触れると、扉は嘘のように軽々と開いてしまった。

扉の向こう側に現れた広大な空間を見て、5人は目を見張った。石造りの広場には何も置かれておらず、その突き当たりに一枚の肖像画が掛けられている。広場内に灯りは置かれていないのに、何故か人の顔がはつきり判別できるほど明るい。

「光のエLEMENTが満ち溢れている……」

カストウールが思わずつぶやいた。そのまま一行は肖像画の前まで進んでいった。

レイム神の肖像画はぼんやりとした光に包まれていた。

「綺麗……こんなに綺麗な人見たことがない……あ、人じゃないわね」

ライザがうつとりとつぶやいた。マヒトもオルノスも、言葉がないといった様子で肖像画を見つめている。

レイム神は黒く長い髪を背中に流しており、瞳の色は右が黒、左は明るい緑色をしている。色白で整った顔立ちはかすかに微笑みで彩られており、見るものの魂が吸い込まれてしまいそうな魅力に満ちている。また、女性的とも思える容貌なのに、男性的な雰囲気をもっと出している。

「この肖像画は、誰がいつ、何の目的で描いたのか定かではありません」

せん。しかしこの廟には500年以上前から伝わっています」

カストウールは思わず膝を折って両手を胸の前で組み、頭を下げて祈りの姿勢をとった。ライザとマヒトもそれにならってひざまずく。信仰がないと自称するガイルとオルノスはそのまま立ち尽くしていた。

「光明神レイム神よ……どうかわれわれグルニアの民に、永久の祝福をお与えください。アルテリアの大地が、常に光に溢れ、豊かな生命力に包まれますように」

カストウールが小さくつぶやいた。ライザとマヒトも真摯な顔つきで肖像画を見つめ、それぞれに祈りをささげた。オルノスも一応付き合いで、立ったまま祈りの姿勢をとる。ガイルはひとり、腕を組んで彼らを見つめていた。

「あなたは祈らないのですか？」

神官に尋ねられて、ガイルは答える。

「祈れば……助けてもらえるのだろうか。しかし俺は、何を祈ればいいのか分からない」

肖像画を見るガイルの表情は、仮面に隠されて読むことができない。しかし声音は神にすぎるようでもあり、また突き放すようでもあった。神官は興味深そうにガイルを見た。

ガイルは一息つくと、左手を胸に置く古い祈りのスタイルでつぶやいた。

「ニールの丘に再び世界樹が育ち、五大神が愛した美しい大地がよみがえるよう……生きとし生けるもののすべてが、幸福でありますように」

その祈り声を聞いて、カストウールとオルノスは鋭く振り返り、ガイルを見つめた。

一瞬の後、肖像画が強烈に輝き、広場に光のエLEMENTが満ちる。ガイルの光の力も強さを増し、広い空間全体が光に支配された。

「レイム神が祈りに応えてくださったのかしら」

ライザが呆然として言った。彼女はエレメントを見ることはできないが、空間の空気が一変したことは気づいていた。ガイルは周囲に聞こえないよう小さくつぶやいた。

「五大神は、常にアルテリア大陸の傍に在るんだよ。多分」

五人が祈りを終えて塔の外に出ると、久方ぶりの太陽が西の空に沈みかけていた。太陽の周囲の雲は細くたなびき、薄桃色に染まっている。

「いつの間にか空が晴れていたの……珍しい」ライザがポツリとつぶやく。

その光景を眺めながら、一行は日没まで塔の入口に立ち尽くしていた。

5人は宿に戻り、食堂で夕食をとることにした。メニューを見たマヒトが驚きの声を上げる。

「なんだろう？　ほとんどの料理が傍線で消されている。デザートは全滅だあ」

「不作続きで食材が入らないのね。……サボテン料理はけっこ揃っているみたいけど」

ライザもため息混じりに言い、とりあえずサボテンと川魚の炒め物、羊の串焼き、ライ麦のパン、ブドウ酒のボトルなどを注文する。全員のグラスにブドウ酒が行きわたったところで、カストゥールが声を上げた。

「みな今日のご苦労だった。明日からもよろしく頼む」
「乾杯——」

カキツ、と陶器のグラスが鳴る音が響いた。ガイルやライザはブドウ酒を一息で飲み干し、再びボトルに手を伸ばす。オルノスとマヒトは素早くパンを確保した。

しばらく食事に専念した後、カストゥールがおもむろに言った。

「今日の魔物の話だが……率先して戦闘の指揮をとったガイルは、アレが何なのか知っているな」

ガイルは軽くうなずいて答えた。

「火の精霊の成れの果てだな。大陸のエLEMENT力が全体的に弱まって、聖霊たちは存在を保てなくなっている。自分の力を弱めないために、本能的に相反する水のエLEMENTをもつカストゥールを攻撃した。そして同じELEMENTをもつライザの力を取り込もうとしていた」

「やはりガイルも私と同じく、ELEMENT力を見ることができなんだな」

カストゥールは複雑な顔をしてガイルを見る。

「え……？ そんなもの見えるんだ。信じられない」

驚いてマヒトがつぶやいた。カストゥールはうなずいて言う。

「私が水、オルノスが土、ライザが火、マヒトが風……今回の任務ではELEMENT力が特別に強い人間を選んでいる。ガイルは光と闇が強いかな……全部混ざっているが」

「光と闇……」

オルノスが小さくつぶやく。ライザはガイルをちらりとみて言った。

「あなた何者？ 複数の魔術が使えて、すべてのELEMENTをもつなんておかしいわ」

「うーん……まあ単なる特異体質だよ。生まれつきだが、実は自分でもよく分らない」

ガイルは笑って言った。

「あ、そう……」

ライザは深く追求しなかった。

そこで、オルノスが少し追求してみる。

「先ほどレイム廟で、『ニールの丘に再び世界樹が育ち……』と言っていましたね。世界樹が在った場所には諸説ありますが、あなた

はどうして場所を限定しているのですか？」

ガイルは少し考えて言った。

「俺は一時、世界樹があつたといわれる場所を見て回ったことがあつてね。あの丘は現在荒野の一部だけど、不思議なほどにエレメント力が満ちあふれている。だから、ニールの丘に精霊樹があつたと確信しているんだ」

「へえ」。エレメント力が見えるって、便利なんですねえ」

オルノスは少し羨ましそうにつぶやいた。

「さて」カストウールは全員の顔を見わたして話題を戻す。

「弱い魔物は力押しで簡単に倒せるが、さっきの火トカゲみたいなヤツはそうはいかない。俺かガイルがどのエレメントをもつ魔物が確認・指示してから、相反する、あるいは同質のエレメントをもつ者は後方から支援することしよう」

「了解」全員がそれに答えて言った。異存のあろうはずがない。

やがて、食堂に十人ほどの集団がやって来た。見たところ、若い兵士ばかりのようだ。

カストウールは立ち上がって声をかけた。

「お前たち、もう病は大丈夫なのか？」

顔色の悪い兵士が5人の方を見て、飛び上がる。

「か、カストウール王子!？」

その一声とともに、全員の兵士があわてて跪き、敬礼の姿勢をとる。

「は、はい! 明日にはここに残った58人全員が動けるかと思われます」

「指揮は誰がとっている？」

「將軍はみな城に戻られたので、僭越ながらこの第三小隊長イシャスが指揮をしております。明日には城に向かって出立する予定です」
「そうか……指揮官がふがいないばかりに、苦勞をかけて申し訳な

い。王族の一員として侘びを言う」

「いえいえいえ、いえいえいえいえ！ 私たちの力が及ばないばかりに、指揮官の方々にはとんだ苦勞をおかけして！」

「いや、王族の過ちだ。魔王との過去の戦や取引をろくに調べもせずに、兵士たちを危険にさらしてしまった……」

「とんでもないです！」

カストゥールも兵士たちも、自分が悪いと言い張って譲らない。そのやり取りを、ガイルら4人は面白そうに見学していた。

しかし、それが終わりそうにないのを見て取ったライザは思わず言った。

「どっちが悪いとかどうでもいいけど、黒い霧について何か情報はないわけ？」

「ああ、そうですね…… あれは絶対的な恐怖です」

イシャスは思い出したように言った。その返答の後半は、戦慄に震えていた。

「あの霧は、きっと暗黒神の化身です。魔王を守るために、我々を恐怖のどん底に陥れたのです！」

「暗黒神の化身……」

オルノスは誰にともなくつぶやく。イシャスは小さく頷いた。

「霧の中に入った途端、我々は霧の粒子が体内に侵入してくるのを感じました。そしてあつという間に、体が黒い霧に乗っ取られてしまったのです。やがて、右も左も分からない闇の中で、過去の自分の過ちや恥などの消し去りたい記憶が蘇って……気がついたら、完全に闇に吞まれて、敵も味方もわからなくなっていました」

「それが暗黒神の化身だと？」

「人間を暗闇の恐怖に陥れる……まさに暗黒神の所業に違いないでしょう」

カストゥールはちらりとガイルとオルノスを見る。

「それは人間の一面に過ぎないと思うが……忘れていたことを思い

出させるというのは……暗黒神の厳しい一面というところか……」

オルノスが考え込む。イシャスは変なものでも見るような目で、オルノスを見た。アルテリアでは、暗黒神は諸悪の代名詞。中立的な、あるいは擁護する意見など、初めて聞いたのだろう。ライザとマヒトも、顔を見合わせて肩をすくめる。

「ガイルはどう思う？」

「そうだなあ……。個人的には、確かに暗黒神の意識を感じざるを得ないかな。何しろ恐怖の大王だからな。って俺は何言ってるんだろうな。訳分らないな、うん」

聞くだけ無駄だった。

しかし続く一言に、カストゥールとオルノスは軽く目を見張った。

「しかし、魔王も守りたいというのは、本心だろう」

「……それが本心なのだとしたら、クオン神も情が深いことですね」
オルノスの言葉に、今度はガイルが軽くのけぞった。そのまま石のように黙り込んでしまう。イシャスたちはさらに理解不能という感じでオルノスを凝視した。

「それで……いったいどうすれば黒い霧を越えられるだろう？」

話が進まない大人たちに業を煮やして、マヒトがやや強引に話を引き戻した。「君たちとは一度腹を割って話さないとぶつぶつ」と、訳分らないことをつぶやいて、遠いところへ行っているガイルを放っておいて、カストゥールは頷いた。

「僕は、そんな闇に負けない強い心があれば、きっと通り抜けることができると思う。一度ダメだったなら、何度でも挑戦すれば……」

「あのね、そんな時間ないでしょ。ギャラに見合った仕事を最速で確実にこなす、それがプロってものよ。だいたい、そんな言い方は兵士に失礼でしょ」

ライザはマヒトをあからさまに子ども扱いしていなした。「何度も挑戦した方が、結果的に早いかもしれないじゃないか」マヒトも

負けずに言い返す。

「ガイルの魔術で何とかならないのか？」

カストウールが尋ねた。石化していたガイルは顔を上げて眉をひそめた。

「レイム神の神殿で光の力が増幅されているから、できないこともないが……その後のことを考えると、少々不安だな。魔力は無限じゃないからね」

「じゃあ、魔術を使わずにうまく切り抜ける方法は？」
さらにカストウールが尋ねる。

「魔術で黒い霧の病にかからないようにする手がある。この方法ならばそんなに魔力を消費しない。各人の嫌な過去が蘇ることも、少しは抑えられるだろう……多分」

「『多分』ってあたりが、不安ですね」

オルノスは頭を抱えた。よほど嫌な過去があるらしい。

「まずは最善と思われる方法で試してみて、ダメなら次の方法を考えればいいわね。死ぬほどの危険がないことは兵士たちを見れば分かるし、とりあえず賛成」

ライザは拳手しながら言った。「僕が提案した方法とあまり変わらないじゃないか」と文句を言いながら、マヒトも賛成の意を示す。オルノスも、おそらく金銭的な理由と多少の興味からしぶしぶ承知した。

「じゃあ、そういうことで。今日はキツイ戦闘もあつたし、ゆっくり休む必要があるだろう。そろそろお開きにしよう」

カストウールの一言で散会となる。

その後、イシャスがこつそりとライザに近寄って言った。

「カストウール様は、暗黒神に近い考えをもつ者を信頼されているようですが……その、大丈夫なのでしょうか？」

イシャスが真剣に心配しているのが分かって、ライザは軽く笑い

ながら言う。

「ちよつと変だけど、悪い人たちじゃないわよ。だいたい、カスト
ウル王子は他人の影響をそのまま受けるタイプじゃないでしょ？
要らぬ心配だと思うわ」

翌日の早朝にカノッサの街を出たカストウルら一行は、街道か
ら横道に入り、石ころとサボテンが適当に転がる荒野を歩き続けて
いた。横道に入ってから、人影や動物どころか、幸運にも魔物す
ら現れることはなかった。

時が白昼にさしかかろうとしたその時、辺りを一陣の冷たい風が
吹きぬけた。

「な……何？ 今の風……」

ライザは思わず自分を抱きしめるような仕草をして、周囲を見渡
した。

「来たか……？」

一行は自然と武器を構える。ガイルは剣を構えながら、いつもよ
り少々長めの呪文を唱え始めた。

呪文が終わると同時に、カストウルは強烈な違和感に襲われた。
鋭くガイルを見る。

「……いつたい何をした！？ 皆の属性が闇になっている」

「黒い霧の粒子は、闇の属性のものに侵入することはできない。少
しの間、皆に闇属性になってもらった」

「げげっ！ そんな……バカな……！」

マヒトはパニックになりかけ、思わず全身をパタパタと手で払っ
てしまう。

「仕方ないだろう？ 他に上手い方法が見つからないんだから。い
ちばん消耗が少なくて済むんだよ」

ガイルはため息とともにぼやく。

そう言っている間に、冷たい風はゆるやかに黒い霧に変わっていった。瞬く間に、連綿とした黒い帯ができあがり、一行に迫ってくる。

「うわあー！ ど、どうしましょう！ どうすれば……ひええ！」

今度はオルノスがパニックになりかける。

「あ、後は気合とか？」

マヒトが顔を引きつらせながらつぶやく。

「なるべく……過去のことを思い出さないように……今の瞬間だけに集中しながら、走り抜ければ、多分大丈夫……かな？ うん、まあ」

「……思いっきり自信なさそうだな……」

今度はカストゥールが頭を抱える。しかし、次の瞬間思い切って顔を上げ、半ば投げやりに号令を下す。

「とにかく、行こう。気合だ……」

5人は黒い霧に向かって突進していった。

「あれ？」

カストゥールはいつの間にか光のない闇の中に立っていた。周囲にいるはずの同行者たちも姿を消している。

「黒い霧の中なのか？ 見た目と違って随分奥行きがあるな」

首をかしげながらつぶやく。走っても出口にたどり着かないような気がして、ともかくにも歩を進めていく。

何故か冷静のままにいる自分を、多少いぶかしく思いながら……。しばらく前方と思われる方向に歩いていると、前方にぼんやりとした光が現れた。

「……肖像画？ レイム神？」

薄明かりに照らされたような絵は、先日レイム廟で見た光明神の肖像と、全く同じ風貌の人物が描かれていた。微笑むような表情もレイム神と同じだ。

しかし、色彩が異なることに気付く。

肖像画の人物は、白銀の髪、淡い紫色の瞳をしていた。

『クオン神……私が読んだ書物の中では、悪鬼の形相と伝えられていたが……』

「……誰だ!？」

カストウールは四方を見回した。もちろん、人の気配はない。

『何故、自ら悪神となることを望まれたのか。五大神と悪神に分けられたのか。伝承は何も語ってくれない』

カストウールは気付いた。これは自分の声だ。

「誰かの記憶なのか? ……こんなことを言うのはオルノスかガイルくらいしか思いつかないが」

言いつつも、我知らず肖像画に見入っていた。絵から感じられるのは、レイム神のような神々しい光ではない。それは、暗闇の中で方向性を失ったときに現れる一筋の明かり。

「道標……」

カストウールはこれまで感じたことのない安らぎを覚えていた。

先ほどからつぶやき続けている人物も、安らぎと癒しを感じているような気がする。

『クオン神の本質は、混迷の中にある存在を、それにとって混迷ではない場所へと導く、道しるべのようなものではないのか』

つぶやいた声は、自分のものなのか他人のものなのか、判断がつかない。

しばらくカストウールが肖像画を見つめていると、突然四方八方から烈火の炎が押し迫ってきた。

『うわああああ!!』

カストウールは思わず叫び声を上げた。焔に囲まれて、前にも後ろにも、横にも逃げ場はない。灼熱が皮膚を焼き、舞い上がる火の粉が容赦なく体に降り注いでくる。

火の粉を必死で振り払いながら彼はわめいた。

『母さん、エリザ……！！　どこにいる！？　返事をしてくれ。頼む……』

『暗黒神を信望する悪魔には、火の女神の制裁を。聖なる炎で浄化すれば、まっとうな人間として生まれ変わることができる』

轟音の中、どこかから隣人たちの声のはつきり聞こえてくる。

『許せオルノス。家族ともども、村の皆のために死んでくれ』

『……何てことを……。私は暗黒神を信仰しているわけではありません！　ただ、歴史の真実を知りたいだけですっ！』

叫びながら、自分の服や髪に火が燃え移るのを感じた。痛みは不思議と感ぜない。ただ、熱さを凌駕する怒りが全身に込み上げてる。

オルノスは激しくかぶりを振った。

村は貧しい。エリザからの手紙によれば、最近は搾取する村長への不平が高まり、暴動すら起こりそうな雰囲気だったという。村長は村人の絶望と怒りを、自分と家族に向くよう仕向けたのか。それは生け贄じゃないのか？

違う、それどころじゃない。母さんたちを捜さないと……。

どうか無事でいてくれ……！！！！

炎は竜のように激しくうねり、襲い掛かってきた。

もう、駄目なのか……

『神よ……！』

オルノスが叫んでいるうちに、周囲は再び暗黒に包まれた。

『……大丈夫か？』

オルノスは全身に針で刺されるような痛みを感じながら、薄目を開けた。

目の前に、先日見た肖像画の人物がしゃがみ込んでおり、ぼんやりとした光に包まれている。そしてすみれ色の双眸で心配そうに、

少し困ったようにオルノスを見ている。

『あなたは…… もしや、クオン神？』

『いや、通りすがりの人間だ』

ウソ臭い言い回しは、どこかで聞いたことがある気がした。

周囲は果てしない闇……ここはいつたいどこだろう？

男はオルノスの様子に気付いて言った。

『ここは、暗黒界。一時的に避難している。君の家族は安全な場所へ移動させた』

『……安全な場所とは？』

『グルニア王国、グルトス王城の西。ガーラド山の麓に、私が結界で守る50戸ほどの小さな村がある。ちょうど空き家があったので避難してもらった』

オルノスは小さなため息をついてうなだれた。自分が愚かだったせいで、家族にはとんだ迷惑をかけてしまった……。

『気にするな、こういうこともあるさ。いずれ訪ねていけばいい。』

……結界も万能ではないから……君は安全な街へ送り届けよう』

『家族の元へは……』

男は頭をかきながら申し訳なさそうに言う。

『すまない……力を使いすぎた。人間の身では、加減が難しい……』
いつの間にか、オルノスの火傷は完治していた。

『では、私は去ろう。君は街に着いたら少し休むといい』

オルノスは思わず引きとめようとする。

『お待ちください！ クオン神、あなたはアルテリアをずっと見守ってきた……人々を愛しんでいらっしゃる、そうですね！？』

男は、地面にめり込みそうな勢いで肩を落とした。

『頼むから、そういうのはやめてくれ……』

泣きそうな声でつぶやき、うなだれたまま闇に消えた。

次の瞬間、カストゥールは白茶けた大地に横たわっている自分に気付いた。

「……何やら、見てはいけないものを見てしまった」

カストゥールは口の中でもごもごつぶやきながら起き上がり、武器や携帯品のチェックをする。周囲には仲間たちが点々と転がっていた。

カストゥールは誰にもなく呼びかけた。

「大丈夫かあ??」

「うう……あいたたた。……抜けたのか?」

マヒトがきしむ体を無理やり起こしながら言った。そして倒れているオルノスに目を向ける。

「あゝあ……。オルノスも大変な目にあっただね。家族がいる村はこの先なのかな? 元気できるといいなあ」

「あれが本当にクオン神なら、悪神って感じじゃないわね。オルノスにとっては命の恩人? 本当のところはどうなのかしら……やだ、服が汚れてる」

地面に座り込んだままのライザは、髪を直しながら言った。

ガイルとオルノスは、しばらくの間、港に無造作に置かれたマグロのように横たわったままだった。やがてガイルが、ローブに着いた砂を払いながら、のっそりと身を起こす。

「何とか抜けられたようだな。よかった、よかった」

どこか他人事のような声色だった。

しかし、オルノスは立ち上がることはできなかった。

「何で……俺ばかり? うう……クオン神の陰謀か……ひどい……」

何かつぶやいている。マヒトはそんなオルノスに同情の目を向けた。

「気合が足りなかったのかな……? かわいそうに」

「少し日程が延びてしまいが、オルノスの家族がいるという村に寄ってみるか」

カストゥールがガイルらを見回しながら提案した。オルノス以外の冒険者たちは、顔を見合わせ、笑顔でうなずいて同意を示した。

黒い霧を抜け、しばし休憩した後、一行は再びガイド山を目指した。すでに世界は黄昏の時間帯に移り、眼前には暗い山がぼんやりと浮かび上がっている。

「村はまだなのかなあ……この道沿いにあるといいなあ……」

マヒトは疲労を隠せない声で言った。

「山の麓じゃ分かんないわよね。道に看板とかあるのかしら」

ライザがやや怒ったような声で言う。

「属性を変えたから、疲労感も大きいのか？ 悪いことをした……」
「もう少し休憩した方がよかっただろうか……休憩を取るべきか……」

……

ガイルやカストゥールの声にも張りが無い。というか、すでに独白になってしまっている。オルノスに至っては、黒い霧を抜けて以来ほとんど口を開かない。

一行はただひたすら暗い。

「とりあえず元気出そうよ……。オルノスの家族に会えるよー！」
マヒトがにわかに元気よく言った。そんな少年を見てオルノスは無表情でつぶやいた。

「母も……エリザも、きっと私を恨んでる……」

その声を聞いて、一同はさらなる暗雲を背負い、表情を暗くした。カストゥールが慌ててパーティーを活気付けようと、何か無駄なことを言おうとした、その時――

突如、戦闘を歩いていたガイルが鋭く剣を構えた。

「誰だ……！？」

ガイルの緊張は一瞬にして皆に伝染する。

やがて黄昏の薄闇の中から、三頭の黒い狼を従え、黒いマントをまとった年齢不詳の男が出現した。

男はカストウールら一行に向かって静かに尋ねた。

「私は死を司る神・デュラガに仕えるアスラというもの。お前たちは、何の目的があつてクオン神の結界内に入り込んだ？」

カストウールが応えて言う。

「私はグルニア王国第三王子のカストウール。グルトス王城の民の間で、デュラガ神ら闇のものたちが、王城に攻め込む可能性があるとの噂が流れている。よつて、デュラガ神の真意を確かめに調査隊を組み、ガーラド山へ向かつている」

「兵を差し向けたは、そちらが先であろう？ デュラガ神の怒りが解けるとは思えぬ」

アスラが短く合図をすると、狼たちは野獣のうなり声を上げた。戦闘を避けたいカストウールは、剣を構えつつも冷静に言つた。

「出兵したは国王の浅慮、父に代わつて謝罪するつもりだ。まずはデュラガ神に直接お会いしたい。この場は通してもらえないだろうか」

「クオン神の許可もなく、デュラガ神の居城へ向かう人間を阻止するは私の役目。悪いがここで消えてもらおう」

「待て……！」

ガイルは思わず声を上げたが、三頭の狼は突然形相を変えたかと思つと、吠えながら黒い霧を口から噴射した。カストウールらは左右に散つてそれを避ける。

「ちつ………！」

ガイルは軽く舌打ちして、呪文を唱えた。その瞬間、まばゆい光の粒子がカストウールらを包み、彼らを守る光の結界が完成する。

「光の魔術……！？ 光の精霊がいるのか？」

アスラはひるんだが、一瞬の後に呪文を唱え始めた。狼たち結界を恐れずに突進してくる。魔術が通じないと分かり、肉弾戦に持ち

込もうとしているようだ。

とつさにオルノスが槍で、ライザが短剣で応戦したが、狼は難なくそれらをかわした。

「マヒトを狙っている！」

カストウールは叫んで、手持ちの剣を狼の一頭に向けて投げつけた。剣はいちばん大きな狼の後ろ足に命中。その狼は吠えながら転がって暴れた。

同時に、オルノスが横合いから出した一撃がもう一頭の狼の首に当たり、狼は転倒する。

「バカにするなあつ！」

マヒトは叫びながら鋭く弓矢を放った。矢は最後の狼の前足をかすめた。しかし、狼の勢いは衰えない。

「ち、ちくしょう」

マヒトは慌てて矢をつがえようとしたが、狼の体当たりをまともに受け、もんどりうって倒れる。狼の鋭利な牙が、マヒトの首に食らい付いた。

「マヒト！」

ライザが狼に短剣を連投した。カストウールは武器を失っていたので手近な石を、オルノスは体を滑り込ませるようにして槍を、狼に突き出した。

最後の狼が力尽きたのを見届け、カストウールらはまだ息のあるほかの狼に止めを刺し、急いでマヒトに駆け寄る。

その間にアスラの詠唱が完成した。

結界を保つために詠唱を続けていたガイルに、闇色の槍が降り注ぐ。強力な闇の魔力を帯びた槍は、力を弱めつつも光の結界を通り抜けた。

アスラの詠唱の完成を確認していたガイルは、詠唱を続けたまま、かるうじて黒い槍の雨から逃れる。アスラが再び詠唱を始めた。

ガイルは光の結界を強めた。光の粒子は結合してまばゆい光明と

なり、アスラの視力だけでなく、体力までも奪っていく。

「く……これほどの力をもつ術者を連れていたとは……」

アスラは思わず詠唱を中断し、2、3歩後退した。

「黄昏の神、アスラよ。ここは引いてくれ。カストゥール王子は、デュラガ神に対して悪いようにはしない。絶対に」

「……お前は奇妙な仮面を付けているが……いったい何者だ。私のことを知っているのか？ まさか、光明神レイム？」

マヒトの容態が気になるガイルは、イライラしながら言い捨てた。
「俺の正体などどうでもよからう。とにかく引け。引かねば、消す」
「……」

アスラは狼たちの死骸を残し、黄昏に溶けるように消えた。ガイルは結界を消し、慌ててマヒトが倒れている方へ走り寄った。

「おい、大丈夫か!？」

薬で治療に当たっていたライザが、泣きそうな顔を上げてガイルを見る。

「どうしよう……急所は外れているけど、出血がひどいわ」

首から流れ出る血は、マヒトの上着を鮮血で染め上げていた。マヒトは完全に意識を失っており、顔をしかめて苦しげな息を断続的に吐き出している。

「……………」

ガイルは急いで強力な水の魔術を用い、マヒトの治療にあたった。空中から現れた清冽な水滴がマヒトの首で弾けると、傷は一瞬で快癒した。

少しして、マヒトの息遣いが穏やかなものに変わっていった。

「マヒト……よかった……」

ライザは思わず泣き崩れた。カストゥールとオルノスも、大きく息を吐いて座り込んだ。

「どこかでゆっくり休ませた方がいいだろう。傷は治癒していても、

だいぶ体力が失われている……」

ガイルはつぶやきつつ、よろよろと皆から離れた場所へ移動していった。そこで突然激しく嘔吐し、そのまま倒れこんだ。

カストウールは慌ててガイルの元へ駆け寄った。

「うわ、ちよつ……ガイル！？　しっかりしろ！」

「お……俺も少し休ませてくれ……。暗黒神の結界内で力を使いきた。マヒトは……村で休ませた方がいい。村は、あの丘を越えてすぐの場所にある」

ガイルは荒い呼吸を繰り返し、あえぎながら言った。

カストウールは軽くうなずいて立ち上がった。

「オルノス、村へ向かおう。ライザは引き続き2人の看病を頼む。ひとりで何とか持たせてくれ」

「わ、わかったわ」

「少し休めば回復する」

ガイルが短く言った。

「すぐに戻る」

カストウールとオルノスは村に向かって全力で走り出した。

やがて辺りは暗闇に包まれ、世界は完全な夜へと変貌を遂げた。

カストウールらが去った後、ライザは呪文を唱えて火を灯してみた。しかし、炎はあまり大きくならず、薄ぼんやりとした光を放つのみだ。

「暗黒神の結界内は、闇の力が突出して強い。闇の魔法以外はあてにできないだろう」

多少回復しつつあるガイルが言った。

「でも、ガイルは強力な光と水の魔術を使ったわね。あなたの魔力は底知れないわ」

ライザは、意識を失ったままの小柄なマヒトを抱え上げ、ガイルの横に寝かせる。

「そうでもないだろう。現に今は戦闘不能状態だ」

「今回の戦闘は、完全に先手をとられたわね。カストゥール王子もきつと反省している」

それを聞いたガイルは、ため息をつきながら言った。

「仕方あるまい。アスラ神は400年以上前からデユラガ神を守護する、戦の神でもある。俺も力の加減を考えすぎて、不覚をとった」

「結果として、アスラ神とやらは消えてくれたからオッケーね。それより、あなたの魔術はすごく……強烈な光だった」

ライザはガイルを睨み付けた。そしてガイルを問い詰める。

「あなたは人間じゃない。ありえないわ。いったい何者なの？ 私たちに正体を隠して、何か考えがあるの？」

「……俺は本当に人間として生まれたんだよ。確かに神と呼ばれた時代もあったが、諸事情で再び人間に戻っている。……アルテリア大陸を救うための方法がはつきり分かるまでは、俺の正体など明かしても意味がない。むしろ、逆効果だ」

ライザの剣幕に負けて、ガイルは降参したように言う。ライザはそれを聞いて軽く目を見張った後、ふっと息をついた。

「そう……私と少し、似ているのね」

ライザはガイルの仮面にかかった前髪を、そつとかき上げた。そのまま二人は、じつと見つめ合う。

ライザはガイルの額にそつと口付けし、仮面に手を掛けた――。

意識をとつくに取り戻しているマヒトは、もう我慢の限界だった。

「き……君たちは、いったい、何を、僕の横で」

羞恥のあまり、言葉がカタコトになっている。ライザははっと顔を上げてマヒトを見た。

「マヒト！ 体はもう大丈夫？ 動けそう？」

「いや、全然動けないけどさあ。もう、何やってるんだよ！」
真っ赤になって叫んでいる。

「あと少しで、ガイルの仮面を外すことができたのに……間が悪い

わね。まあ、元気になってよかったわ」

「残念だが、この仮面は魔力を帯びているから簡単には外れない。マヒトが声をかけてくれて、よかったんじゃないのか？」

ガイルがニヤリと笑って言うのを聞き、ライザは憮然としてガイルを睨む。

「もう、勝手にしてくれ」

マヒトはそっぽを向いて言い捨てた。その視線の先に、先ほど自分に噛み付いた狼が倒れている。マヒトの腹から、せつなげな空腹のメロディーが流れた。

「あれ……食べられないかなあ……うまそう」

悲しげにつぶやいた。

一方、その頃――。

村にたどり着いたカストゥールとオルノスは、閉ざされた門の前で立ち尽くしていた。

「灯りも点いているし、人の気配はあるようだな」

カストゥールがつぶやく。

オルノスは思いつき息を吸い込み、大声を上げて門を叩いた。
「すいませーん、旅の者ですが！ 急病人がいます。助けてください！」

しばらくして、門の脇の小窓から、門番と思われる男が顔を出した。

「この村に旅人など来ない。それにクオン神の結界で守られているから、入り込もうとしても無駄だ。魔物は帰れ」

「そ、そうだ、この村にマーリンとエリザという、女性はいませんか？ 私はオルノス、マーリンの息子です。実は、北方のシシリア国からはるばる訪ねて来たのです！」

オルノスは今にも小窓を閉めようとしている門番に、必死に食い下がる。

「急病人が2人いるのも本当です。宿代は払います。助けてください！」

門番は少し考えた後、「ちょっと待っていてくれ」と言いながら小窓を閉めた。

しばらくして、再び小窓が開く。

「オルノス……？　オルノスなのかい？」

「……母さん」

オルノスは思わず口ごもった。詫びなければならないのに、言葉が出ない。見かねたカストウールが、オルノスの肩をポンと叩いた。オルノスは意を決して、言葉を続ける。

「僕が浅はかだったばかりに……軽はずみに暗黒神に興味をもったばかりに……母さんとエリザを危険な目に合わせてしまつて、本当にすまない。僕は……」

「何を言っているんだい。悪いのは村長だろう？　そんなことよりケガ人つて本当かい？」

オルノスの謝罪は、あっさりと聞き流された。

マーリンの後ろから妹のエリザが顔を出す。

「みんな、急いで救助に向かおう！　門番さん後は頼みます。オルノス！　場所どこ！」

その瞬間、バーンと門の扉が開いた。2枚の戸板を持った7、8人の男たちが、わらわらと門からあふれ出る。

「姐さんは危険だから、村に残つててくんなせえ！」

「俺たちだけで十分であ！」

「そうかい！？　じゃあ私は看病する場所を用意しておくから。皆頼んだよっ！」

「へいっ！！！」

「……」

「兄さん方、場所はどこでい！」

はっ……カストウールは我に返って指でさし示す。

「あの、丘の向こうだ」

「合点承知……！」

戸板を担いだ男たちは、風のように夜の闇へと消えていった。

「ぼ、僕たちも行きましょう……」

走り出そうとしたオルノスの肩を、カストウールが軽く叩いて首を振った。

「いや……足手まといなのが明らか過ぎる」

「兄さん、元気そうでよかった！」

エリザは花のような笑顔でオルノスを迎えた。オルノスは苦笑いで応える。

「まったく……相変わらずですねえ。母さんも、エリザも」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3728h/>

アルテリア大陸の黄昏

2010年10月11日20時08分発行